



筑紫路

発行 自衛隊福岡病院 春日市小倉東1丁目 61番地

TEL 092-581-0431

ホームページ



「すみなすものは 心なりけり」

自衛隊福岡病院長兼春日駐屯地司令

陸将補 川口 雅久

現在（八月下旬）、新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）のいわゆる「第五波」の真ただ中にあります。昨年春以降、既に一年半近く、個人としても組織としても新型コロナへの対応が続いていることになりました。さらに、今夏、追い打ちをかけるかの様に、九州地方に線状降水帯が停滞し続け、洪水・土砂災害等も頻発しております。いきおい、「疲れ」や「閉塞感」が出てくるのも不思議ではない状況といえるでしょう。

このような状況の中、自衛隊福岡病院は、変化に対応しつつ新型コロナ対策を実施しています。地方自治体や地域の医療機関との連携を図りつつ、地域の輪番制夜間・休日当番病院への参画も継続し、発熱外来や軽・中等症患者の入院加療を実施しています。また、ワクチンの職域接種については、特に優先度を高くして取り組み、「春日接種所」を駐屯地体育館に開設するとともに（写真）、方面内の他の接種所にも人員を派遣しております。また、自衛隊が主体となって運営されている政府の大規模接種センターにも要員を派遣する等、鋭意、接種の推進を図っております。一方、九州・沖

縄地区の基幹型自衛隊病院の恒常業務として、他駐屯地医務室の診療支援や募集関連の身体検査判定医官等の各種支援も例年通り実施しています。



春日駐屯地における職域接種

冒頭でも述べたとおり、新型コロナ対応は長期戦の様相を呈しています。自衛隊はもとより国内外社会全体としても、感染症対応でこれほど長期に亘るものは、少なくともここ数十年なかったものです。感染症の場合、職場だけでなく日常生活を含め二十四時間の対応が必要になります。対処の烈度自体は概して高くはないものの、感染や変異の確率が高くその周期も短いこともあり、終わりが見えない（いつまで続くかわからない）という点が今回の特徴の一つです。その結果、自覚症状の有り無しにかかわらず、一種の「閉塞感・疲れ」が、個人にも組織・社会にも蓄積されてきていることは間違いありません。断続的に感染状況とその対処の強弱が繰り返される点は、陸上競技等における「インターバルトレーニング」のようでもあり、今回の場合、特に精神的に高い負荷がかかる状態といえます。

では、このような状況下で生活し、業務を進め、責務を果たしていくにあたり、どのように臨むべきか。私自身は、「まず走り出す走りながら考える 振り向き過ぎない 前向きに成功体験を評価する」そして、「ゴール（目的・目標）を見失わない」ということだと思っています。

不確定な状況が続く中、適切に対処し成果を出し続けるには、（特に感染症対処では）タイムイングが重要な要素になります。何を求めるにしても、初めから完璧を求めるあまり機を逸すれば、期待する効果が得られないばかりか、逆効果にすらなりかねません。拙速は避けなくてはなりません。早く急かつ適時な対応が重要です。質が伴えばさらに良いのでしようが、そこに固執し過ぎず、不備・不具合が発生することはある程度許容することも大切です（もちろん分析・対処は必要です）。また、長期戦になると、どうしても本来の目的・目標を見失い、近視眼的な情報や行動に引張られがちです。現在、巷にはあまりにも否定的・絶望的な情報や慨嘆が氾濫しているのも事実です。そうしたものに接し続けているだけで、心が削られ毛羽立ちかねません。無論、樂觀視し過ぎることは厳に慎まなくてはなりません。現状についての客観的かつ正確な数字や事実を認知した上で、これまで実施してきたことを正しく評価し、自信を持って、前向きに、かつ謙虚に、目標・目標を意識してこの難局に取り組んでいく心構え（心がけ）が必要だと思えます。

今から二十年近く前、現在でも私が最も尊敬する自衛官のひとりである当時の上司は「しなやか

に」という言葉を好んで使っておられました。色々な解釈ができるとは思いますが、私自身は「様々な事態に対応するにあたり、素早く、柔軟に、粘り強く、結果に囚われ過ぎず、あくまで前向きに」対応することと理解しています。状況が急速に、しかも振幅大きく動いていく現在のような状況において、特に生きてくる心構えであるうと思えます。

インターバルトレーニングは苦しい訓練ですが、基礎体力、特に心肺機能を高めるには非常に有効なトレーニングです。今回の困難な状況に「しなやかな心構え」で対処し、その努力や経験を個人・組織の基礎体（隊）力やレジリエンス向上の糧にしたいものです。

病院施策等の認識統一を図るとともに、各駐屯（基）地での新型コロナウイルス感染症患者発生時における教訓及びワクチン接種に係る情報共有を図りました。



ワクチン接種



対馬派遣出発時の集合写真



医官による問診

診療圏内衛生科長等集合訓練
六月十五日、当院の診療圏内における衛生科長等集合訓練をVTCにて実施し、二十一個駐屯（基）地の三十一名が参加しました。

ワクチン職域接種
七月五日〜九月三日の間、職域接種の枠組みで希望する自衛隊員等に対し、努めて早期にワクチン接種を完了させ、新型コロナウイルス感染症拡大抑制に寄与することを目的として新型コロナウイルスワクチン接種を実施しました。

部内乳がん検診開始の案内

今年度より新しいマンモグラフィ撮影装置が稼働開始しました。従来の装置と比べ、より細やかな画像が提供できるハイスペックな装置です。

新装置導入に伴い、当院職員及び近傍駐屯地の隊員（四十歳以上偶数年齢の女性）に対する部内乳がん検診を開始しています。基本的には女性の診療放射線技師が撮影を担当し、女性の医師2名でマンモグラフィ画像の読影をしています。



女性の技師による撮影の様子

防疫大看護四期生生活動開始

令和三年三月に着隊した防疫大看護四期生七名は、幹部候補生としての入校・教育を終了し、所属病棟も決まりました。看護師免許も手元に届き、持てる力を発揮すべく、真剣な眼差しで日々の看護業務に取り組んでいます。将来がとてもしんどくありません！皆様どうか温かく見守ってください。よろしくお願ひ致します。



寝衣交換実施中



人口呼吸器の講習受講中

第一回駐屯地花壇コンクール

六月八日～七月二十三日の間、第一回駐屯地花壇コンクールを実施しました。

駐屯地花壇コンクールは、隊員相互の融和団結を図りつつ駐屯地を美化する事と、来院者及び職員に癒しを与える事が目的です。各チームは苗の種類及び配置に工夫を凝らし、とても癒される花壇を作りました。

七月二十六日～七月二十八日の間に審査を実施し、部内審査員は病院長以下十名、部外審査員は来院者等百五十五名に審査して頂き、八月六日の駐屯地朝礼で表彰をしました。

【駐屯地花壇コンクール結果】
優勝 企画室基通混成チーム
優優勝 衛生資材部チーム
第三位 診療技術部チーム
特別賞 診療科チーム



花苗配布の様子



優勝花壇



来院者による審査の様子



表彰式

新着任部長の紹介

この度、第一内科部長兼ねて小児科部長兼ねて副企画室長を拝命しました森西一佐です。新型コロナウイルス感染症の対応をはじめ多様な任務を粛々と遂行しているこの病院の一員に再び加えていただきました。感謝とともに責任を感じております。「融和団結」とよく耳にしますが、この言葉を前職においてまさに実感してきたところで、今後は是非皆様とともに味わいたく、微力ながら尽力したいと思います。



准看護学院第一回山地行進訓練

准看護学院（学院長・山元二佐）は令和三年七月二十一日、第四十六期学生の第一回山地行進訓練を実施しました。

新型コロナウイルスの影響を受け、例年より一ヶ月遅れの実施となり、猛暑の影響が懸念される中、熱中症の発生に留意しながら訓練に臨みました。発生した模擬患者に対し、入校後修得した知識・技術を駆使し対応に当たりました。学生は練習成果を遺憾なく発揮し、全員で完歩しました。



模擬患者を担架搬送する学生

人事往来

（転出者）

《八月一日付》
企画室 三陸佐 刑部 高志
総務部（総務課） 二陸曹 亀澤 洋一
（管理課） 陸曹長 神宮 輝幸
一陸曹 陣内 孝則
一陸曹 高尾 悟
診療科 三陸佐 野中 睦美
一陸尉 馬淵 春菜
一陸尉 小畑 亮輔
診療技術部（放射線技術課） 二陸曹 小川 達矢
衛生資材部（衛生資材課） 一陸曹 山下 太郎
（薬剤課） 三陸曹 伊達 雄基
看護部 三陸佐 石井 樹里
三陸佐 井上 沙緒理
二陸尉 木村 寿希
二陸尉 柴田 奈津美
二陸曹 中嶋 俊裕

（転入者）

《六月一日付》
診療科 二陸尉 佐々木 慧
二陸尉 田上 裕司
二陸陸尉 平本 剛士
《十月一日付》
病院付 一陸尉 大野 智裕
診療科 二陸佐 小林 大晋
一陸尉 樽岡 輝花
佐々 瑠花
二陸尉 横山 之勝
一陸尉 岸川 未来
二陸尉 浦川 奈美
二陸尉 辻 星子
一陸尉 松野 想平
二陸曹 宮崎 翔大
准看護学院 三陸佐 藤武 真理子
診療科 二陸佐 田中 宏史
二陸陸尉 松尾 晋祐

《八月一日付》

企画室 一陸尉 玉川 一博
建替準備室 一陸尉 中村 仁士
総務部（総務課） 准陸尉 武下 英雄
一陸曹 井上 博臣
二陸曹 高堀 崇弘
（管理課） 三陸佐 平位 大
三陸尉 後藤 陽一
一陸尉 林 剛
陸曹長 小野 正一
二陸曹 高邊 勇弥
三陸曹 西野 奨太
診療科（給食課） 二陸曹 横山 かおり
診療科 一陸佐 森西 洋一
二陸佐 葉柴 崇文
一陸尉 相原 一紀
一陸尉 田原 寛之
一陸尉 齊藤 拓也
安田 賢